

水底の剣

みなそこ

つるぎ

三井

みつ

隆

たかし

人 物

源 範 頼 みなものりより（36）平家追討軍の総大将

真 魚 まな（16）海女

天 野 遠 景 あまのとおかげ（41）御家人

和 田 義 盛 わだよしもり（39）御家人

○浜辺

T『元暦二年（1185）九州』

遠くに大小の漁船が停泊している。軍船もいくつも見える。

禪一丁で大股に歩く源範頼（36）。

天野遠景（41）と、少し離れて和田義盛（39）が追っていく（二人は鎧直垂を着ている）。

遠景「蒲殿、どうかお待ちください、蒲殿！」

範頼「止めるな天野殿。三種の神器をいつまでも欠けたままにはしておけん」

遠景、範頼の腕を掴む。

遠景「海に沈んだ天叢雲劍（あめのむらくものつるぎ）は、手練れの海人（あま）共に探させております故、どうか今しばらくの御猶予を」

範頼「そう申して、もう何日になると思うか」

遠景「さはさりながら、自ら海に潜るなど、

源氏の総大将のなさることではございません

んぞ。（義盛に）和田殿！ お主もお止めせんか！」

義盛「俺は昨晚から何度も申し上げてるんですがね。もう、お気の済むようにされたいいいんじゃないですか」

遠景、義盛を睨むと、範頼に向き直る。

遠景「御身に万一のことあらば、鎌倉の御所様に申し訳が立ちませぬ」

範頼「何、案ずることはない。兄上にとって私など郎党の一人に過ぎぬさ。さあ、放してくれ」

範頼、遠景の手を振りほどいて軍船の方へ向かっていく。

範頼「おうい、わしも行くぞ！」

遠景と義盛、船へ走っていく範頼を見送っている。

遠景「ふうむ、何事にもひたむきに向き合われるのは良いことなのだが……」

義盛「宝剣を失くしちまったのは、壇ノ浦で九郎殿が平家を追いつめたせいでしょう。なんで俺達がその後始末を」

遠景「それを言うな。御所様の御命令じゃ」

義盛「肝心の九郎殿はさっさと都に凱旋し
ちまうし。どうせ見つかりっこないんだ。
探す振りだけでいいんだよ」

遠景「それは出来まいなあ……あの方のま
っすっぐな御気性では」

義盛「俺なら、酒飲んで美味しい魚でも食っ
て骨休みするけどなあ」

遠景「お主と一緒にするでない」

○洋上

数隻の軍船と大小の漁船が散開してい
る。海に飛び込む海人たち。

○船の上

周囲が皆飛び込んでいく中、海面を覗
き込んで躊躇していた範頼も意を決し
て飛び込む。

その様子を少し離れたところから見て
いた真魚（16）、範頼の後を追って飛び
込む。

○海中

範頼、必死で水を掻いて潜っていく。
底の方を覗くが、海底がぼんやりと見えるばかりである。

範頼 M 「うぬ……これでは剣を探すところで
は……おおっ！」

突如海流が早くなり、範頼、流されていく。

× × ×

範頼の視線の先に光る点が現れる。

範頼 M 「あれは……」

光が次第に大きくなり、剣の形になっていく。

範頼 M 「神器……天叢雲剣に違いない」

手を伸ばす範頼。だが剣は遠退いていく。必死に追いつがる範頼。

範頼 M 「あと、もう……少し！」

伸ばしたその手が剣を掴む。

範頼 M 「やったぞ！ この源範頼が遂に神器

を探し当てたぞ！ ……あつ！」

海流が一段と激しくなり、視界が暗転する。

○孤島の砂浜（夕）

ハッと目覚める範頼。寝かされていた状態から、上体を起こす。

範頼「ここは…？ そうじゃ、剣は！」

範頼、両手、そして周囲を見回すが、宝剣の影も形もない。

真魚が近寄って膝をつき、範頼を覗き込む。

真魚「気がついた」

範頼「おお、お主、剣を知らぬか」

真魚「剣？」

範頼「そうじゃ。それをわしがこの手で…」
真魚、首を振る。

真魚「何も持ってなかった」

範頼「そんな馬鹿な」

真魚「それより、あの辺は流れが急に変わる。

もう少しで見失うところだった」

× × ×

範頼「……するとわしは溺れたところをお主に助けられたのか」

頷く真魚。

範頼「あの剣は、夢……幻であつたか……」

範頼、悄然として肩を落とす。

真魚「偉い人から、あなたから目を離さないように言われていた」

範頼「そうか……おそらく天野殿であろう」

範頼、周囲を見渡す。

範頼「ところで、わしらはどこまで流されたのだ」

真魚「離れ小島に流れ着いてしまったけど、大丈夫。きっとお父の船が拾ってくれる」

範頼「ああ、お主にも危険な目に遭わせてしまった。済まぬことをした」

真魚「あなた、泳ぎは下手。そんな人が海に潜るなんて危ないことを、なぜ」

範頼「兄上の、鎌倉殿の御命令ゆえ……いや、

そうではないな」

範頼、空を仰ぎ見て嘆息する。

範頼「……わしら源氏の嫡流は、血で血を洗う同族の殺し合いを経て紡がれた。父は親と弟たちを殺し、わしもまた従弟に当たる木曾殿を討った」

真魚、何の話かと目を瞬かせる。

範頼「武士（もののふ）同士の評いならば、業は己に返るだけのこと。しかるに、あるうことか戦の最中、天子様の天子様たる証の一つを失ってしまった」

真魚「天子様の、証し？」

範頼「そうだ。天子様……帝の、古よりの連なりを証し立てる、天叢雲剣を……」

真魚「それ、命を捨てても見つけないといけないの？」

範頼「命を賭して見つけ出さずして、血塗られた宿痾をどうやって贖うというのだ！」

真魚「難しくよく分かんない」

範頼「そうであろうな、済まぬ。お前たち下々の者には関わりのないことであつた」

真魚、少しムツとした顔をする。

範頼「何だ。では、お前たちにもあるのか。

代々受け継がれるべき何物かが」

真魚、立ち上がって水際に行き、沖の様子を窺うと、範頼に向き直る。

真魚「私たちは毎日魚や貝をとって生きている。お父やお母は、そのまたお父やお母からやり方を教わった」

真魚の全身を、背後から夕陽が照らす。

真魚「私も子が出来たら、その子たちに伝える。私たちが受け継ぐものがあるとしたら、きっとそれだと思う」

範頼、光を背にした真魚の姿を見て、目を細める。

範頼「そうか……それがお前たちの……いや、人ならば己の生業が、命を繋ぐと」

真魚「答えになってる？」

範頼「ああ。そうだ、それよりお主、名は何と申す」

真魚「真魚」

範頼「真魚、帰ったらわしに魚の獲り方を教えてくれぬか」

真魚「いいけど……なんで？」

範頼「どうやらわしは、己を頑なに縛り付けていたようじゃ。ここで考えを改め、お前たちの流儀を学ぼうと思うのだ」

真魚、よく分からないという顔。

範頼「いや、流儀より何より、腹を満たす方が先か」

笑う範頼。つられて真魚も微笑する。

真魚「分かった。お父に頼んでみるよ」

範頼「ああ、よろしく頼む」

海を見ていた真魚、大きく手を振る。

真魚「お父の舟だ。おおい、ここにいますよう！」

微笑んで立ち上がる範頼。

沖から船が近付いて来る。

○浜辺（朝）

釣竿を担いで歩く範頼（今度は鎧直垂を着ている）。

それについていく遠景と義盛。

遠景「今日は決して無理をなさいますな」

範頼「分かっておる」

義盛「魚釣りとは、剣を探すのは諦めたの？」

範頼「探すさ。だがその前に、食うものを食って、力を
つけねばな」

遠景「おお、それでこそ我らの御大将というもの」

範頼「見ておれ、旨い魚をたんと食わせてやるぞ」

義盛「一同、腹を空かせてお帰りをお持ちしております！」

範頼「任せておくがよい！」

見送る遠景と義盛を後に、意気揚々と
船に向かう範頼。

(了)